

Q A³ Kyushu University R C Advanced Asian Archaeological Research Center NEWSLETTER No. 9 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター ニュースレター 2016. Jun.



ワークショップ『今日、考古学になにができるか』開催報告

文化財調査法開発部門
比較社会文化研究院 溝口孝司

九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座では、2016年1月30日、伊都ゲストハウス多目的ホールにおいて、九州大学 Progress100 プログラム招聘教員であるプリンダーズ大学（オーストラリア）・世界考古学会議前会長、クレア・スミス教授と、福岡女学院大学・田中英資准教授をむかえて、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターとの共催で「今日、考古学に何ができるか?」をテーマとするワークショップを開催した。当センターでは、本年度の組織改革において、当センターにおける先端的学際領域研究の成果を、地方公共団体への政策提言も含めていかに社会還元するかにつき研究するセクションを新設したが、本ワークショップにおいては、それに先駆けるかたちで、パブリック考古学、文化遺産学、社会考古学のインターフェイスの最先端を確認すること、また、そのことを通じて、〈近代〉と〈グローバル化〉の深化が産み出した正・負の諸帰結に対し考古学にできることは一体何なのかを考えることを目標とした。

田中氏は、トルコの事例を扱いながら、考古学的遺跡の「文化遺産化」の過程で、考古学の実践がいかに考古学者や地域住民、行政、観光客などさまざまな利害集団と過去の人間の文化的・社会的行為の痕跡との相互関係を変えてゆくかについて検討した。発掘調査への参加によって、地域住民の文化財に対する意識だけでなく、彼ら彼女らのアイデンティティーや社会的地位も変わってゆくことが明らかにされた。

溝口は、人間は社会的存在であり、社会性はコミュニケーションにより維持されるという観点に立って考古学を再定義し、考古学とは過去のコミュニケーションの物的媒体の研究を通じて過去の社会的リアリティとその変容につき研究する学問ということ、また、過去を研究するのとまったく同様の観点から、現在の社会的リアリティについて研究することも当然可能となることを確認した。そして、このような視点・立脚点の変更から、考古学を通じた「温故知新」のあらたなありかたについて、過去（北部九州の甕棺墓とイギリス新石器時代の墳丘墓）と現在（ショッピングモール）の考古学的分析を通じて模索した。

スミス教授は、イスラム国／ダエシュを事例として、

ソーシャル・メディアと紛争形態の変化の結合により生じてきた新種のテロリズムにつき考察した。ソーシャル・メディアに媒介されたテロリズムとは、社会的、政治的、宗教的目的の達成のために行使される暴力的行為のインパクトを高めるためのソーシャル・ネットワークならびにネットワーク・メディアの使用として定義され、それは、幅広いオーディエンスに対して身体的、情緒的、もしくは心理的苦痛をあたえることを目指すものである。偶像破壊は長い歴史をもつが、多くの場合文化的偶像は地域社会・コミュニティを支配下に置くための方策として破壊されてきたのであった。これとは対照的に、イスラム国によるソーシャル・メディアに媒介された文化財破壊の推進は、対象文化財の所在する地方のみならず、それを含む地域、それをはるかに越えた国際的オーディエンスへの同時的働きかけとして実行されており、しばしばそれらどうしの間の反応のずれを巧妙に利用してその効果を高めている。そのような観点からして、ソーシャル・メディアは、紛争地における文化財への新たな、そして現在のところ過小評価された脅威であると、スミス教授は結論づけた。

三本の報告に続くディスカッションでは、埋蔵文化財の社会的運用をめぐる活発かつ真摯な議論がなされ、当センターの諸活動を、ここで議論されたようなファクターを意識しつつ社会還元してゆくことの重要性和課題を確認した。当センターでは、このような成果に基づき、引き続き埋蔵文化財調査研究と社会とのインターフェイスのよりよいありかたにつき、研究を継続し具体的成果を挙げて行く予定である。



写真. ワークショップの様子。



より精密で定量的な分析や議論が必要となっている今日の考古学に対して、鉱物学的手法の導入もこれまでより多くなる?それは、もちろん、以前からなされていますが、考古学資料の場合、非破壊状態を保つ必要性や、試料が極めて微量であることなどが研究の妨げになっていることは事実でしょう。ただし、分析機器等の進歩により、これまで不可能だった分析や解析が行えるようになり、その応用法も増えていくのではないのでしょうか。

例えば、X線回折法は、遺物素材の性質などを知る上で有効な手法とされ以前から用いられていますが、一般的な手法である粉末法で精密な測定を行うには、それなりの試料量が要するという欠点があります。この欠点を補う新しい手法として、ガンドルフィカメラや湾曲IP X線回折装置(図1)を用いた分析が挙げられます。これらの手法では、100~200 μm という極微小の試料に対して精密な X線回折データを得ることができます。ガンドルフィカメラを用いた研究例として、海緑石と考えられていた日本の装飾古墳の緑色顔料(緑土)の一部はセラドナイトであったことが確認されています。また、これらの分析法では、鉱物の結晶度解析も行えるので、資料の産出地を推定する上で有効なデータを得られるかもしれません(中牟田他、2002、岩石鉱物科学)。

ところで、上で述べた海緑石やセラドナイトは、雲母粘土鉱物に属します。つまり、両者とも粘土鉱物で

すが、結晶構造は雲母鉱物に類似します。Si-O四面体シートが(Fe, Mg, Al)-O八面体シートを上下から挟み込んで単位構造層を造り、それらがKなどの陽イオンを挟みながら積み重なる構造をとります。簡単に言えば、この積み重なりが規則正しければ結晶度は高く、そうでなければ低くなるわけです。その結晶度は、X線回折ピークの形(鋭さ)で見積もることができるとされてきました。ところが、同じく雲母粘土鉱物であるイライトに関する最近の鉱物学的研究から、結晶度の変化はX線回折ピークの形だけでなく位置にも影響を及ぼすことが解りました。それに対応した新しい結晶度指標も提案されています。

X線回折法では検出しづらい、さらに微細で詳細な分析もまた有効となるかもしれません。イライトなどの雲母粘土鉱物は、単位構造層の積み重なり方の違うものがあり、ポリタイプと呼びます。試料の表面構造をナノメーターオーダーで観察できる原子間力顕微鏡を用いれば、極微粒なイライト粒子でもその結晶成長模様を捉えることができ、個々にポリタイプを決めることができます。図2は、佐賀県泉山陶石(江戸期の有田焼の原料)に含まれる、不安定とされる20ポリタイプを示すイライト粒子の原子間力顕微鏡像で、世界で初めて発見されたものです。このような新しいデータは、考古学資料の産出地などを決める際の重要なキーとなる可能性があるでしょう。

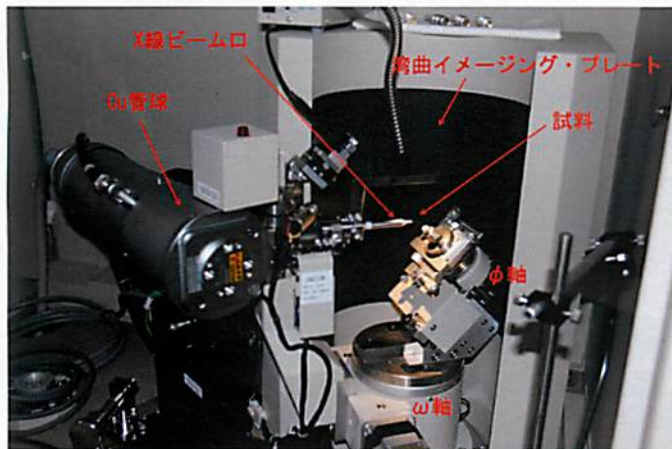


図1. 湾曲イメージング・プレート(IP) X線回折装置

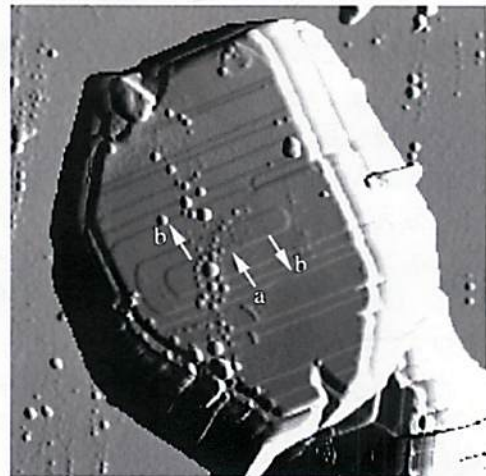


図2. 20ポリタイプを示す佐賀県泉山陶石産イライト粒子の原子間力顕微鏡像(3x3 μm, Kuwahara et al., 2001 C&CMより一部修正)

【センター活動報告】

2016年4月26日 第9回アジア埋蔵文化財研究センター研究会
講演題目:「周防乗福寺跡出土の滴水瓦をめぐって」
講演者:伊藤幸司(比較社会文化研究院)

2016年5月13日 第10回アジア埋蔵文化財研究センター研究会
講演題目:「遺跡探査の概要とこれまでの探査事例の紹介」
講演者:水永秀樹(工学研究院)

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター ニュースレター No. 9

発行:〒819-0395 福岡市西区元岡744
九州大学アジア埋蔵文化財研究センター
編集:足立 達朗
発行日:2016年6月30日
TEL:092-802-5661/FAX:092-802-5662
E-mail:qa3rc@scs.kyushu-u.ac.jp
ホームページ <http://scs.kyushu-u.ac.jp/qa3rc/>